

## 南米アンデス山脈における野生動物ビクーニャの住民主体による保護活動と村おこし Wildlife Conservation of Vicuna(Vicugna vicugna) and Village Revival of Andean Mountain in Peru

大山 修一<sup>1\*</sup>

Shuichi Oyama<sup>1\*</sup>

<sup>1</sup> 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科

<sup>1</sup> Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

南米アンデス山脈では、標高 4000~4800 メートルの標高帯はプナと呼ばれる。このプナ帯には樹木は生育せず、イネ科やキク科の草本が生育し、高地草原の景観を呈している。プナの面積は、ペルーの国土 (129 万 km<sup>2</sup>) の約 12 % に相当する。ビクーニャ(Vicugna vicugna) は、南米にのみ生息するラクダ科動物の一種である。南米のラクダ科動物にはリヤマ (Lama glama) とアルパカ (L. pacos) が有名であるが、これら 2 種は家畜である。一方、ビクーニャとグアナコ (L. guanicoe) という野生動物が生息する。ビクーニャの体重は 30~45 キログラムほど、体長は 80~110 センチメートルであり、4 種のなかでは最も小さい。背、側部、首、頭の部分が栗色で、腹部、わき腹、あごが白い。ビクーニャの毛色は、その高級な毛の質を表現するために、黄金色と称されることもある。華奢な感じ、すらりとした容姿は、高貴なイメージを感じさせる。

2012 年の時点では、1 キログラムのアルパカ毛が 5 ドルほどであるのに対して、ビクーニャ毛は 550 ドルで買い取られる。インカ時代には、人びとが人垣をつくり、大規模な集団猟チャクを実施し、ビクーニャを生け捕りにし、毛刈りをされたのちに、野に放たれた。こうした狩りは、その場所を変えながら、各地区で 4 年ごとにおこなわれ、毛の質の維持と個体数の維持・増加が図られた。ビクーニャ毛はすべてインカの王に献上され、王がその一部を王族に分け与えた。庶民はビクーニャ毛を身につけることは許されず、この禁をやぶれば、死罪に処された。スペイン人が南米に到来する以前の 1500 年ころの推定頭数は 200 万頭である。その後、乱獲により生息頭数が減少し続け、1965 年にはペルー国内で 6000 頭にまで減少した。

ビクーニャを保護するため、ペルー政府は 1967 年に国立自然保護区を設定した。しかし、ビクーニャの毛は高額で取り引きされ、密猟にさらされる危険性があった。ドイツの保護を受け、保護区では密猟を防ぐために、武装警備隊が組織された。このような保護システムによって保護区の頭数は 1969 年に 2647 頭であったのが、1980 年には 18,335 頭へと増加している。しかし、周辺住民の家畜を強制的に追い出そうとしたため、住民と政府の関係が悪化し、1981 年にはドイツの援助も停止した。さらに 1983 年から 1989 年にはテロ活動が活発となり、保護区の管理は放棄された。

政府当局は武装警備隊によって広大な地域をカバーすることは不可能であると認識し、住民主体によるビクーニャの保護と利用が考え出された。1990 年代にはいと、治安が快復し、周辺村はレンジャーを組織し、毎年 6 月から 10 月には集団猟のチャクをおこなっている。ビクーニャは毛刈りされ、ふたたび野に放たれる。毛刈りされた毛の売上金は、村の裁量でレンジャーの給与、集団猟の参加者への報酬、ビクーニャ保護のためのインフラ整備、小学校の建設や水道パイプの敷設など、村びとの生活向上にあてられている。ビクーニャの生け捕り猟、チャクの現状と課題を議論する。

キーワード: ビクーニャ, アンデス, ペルー, 野生動物管理

Keywords: vicuna, Andean Mountain, Peru, Wildlife Conservation